

## 大学生における「就職しないこと」イメージの構造と進路未決定

—テキストマイニングを用いた検討—

杉 本 英 晴<sup>1)</sup>

### 問題と目的

近年、いわゆる「フリーター」などの非正規雇用者や無業者の増加、離職問題の「7・5・3」など、若年層における不安定就労をテーマとした社会現象がしばしば注目を集めている。こうした背景には、「学校から社会へのスムーズな移行」が機能不全となったこと（本田，2005）が指摘され、これまでとくに中学や高校の中退者や卒業者に焦点があてられ、実証研究が蓄積されてきた（e.g., 太郎丸，2006）。また最近では、「大卒フリーター」（居神・三宅・遠藤・松本・中山・畑，2005；小杉，2003）という造語がしばしば用いられるように大学卒業者における不安定就労が指摘され、大学生の進路選択過程を明らかにすることにも関心がもたれはじめている。

このような現状に対し、文部科学省は2004年1月に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—」という報告書を提出し、「勤労観」や「職業観」の育成を主とした就業対策に着手しはじめた。国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）によれば、「勤労観」とは「勤労に対する価値的な理解・認識」であり、「職業観」とは「人それぞれの職業に対する価値的な理解であり、人が生きていく上での職業の果たす意義や役割についての認識」と定義されている。

とくに、「勤労観」は「職業としての仕事や勤めだけでなく、ボランティア活動、家事や手伝い、その他の役割遂行などを含む、働くことそのものに対する個人の見方や考え方、価値観であり、個人が働くことどのように向き合って生きていくかという姿勢や構えを規定する基準となるもの」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター，2002）と定義されているように、「働くこと」に焦点があてられた価値観であり、進路選択に影響を及ぼす要因として実証研究でも取り上げられてきた（柿原，1997）。さらに、「勤労観」とどまらず、「職業（労働）

観」（三川，1991）や「就労観」（植村，1994）など「働くこと」に注目したさまざまな価値観が検討されてきた。

しかしその一方で、「働かないこと」に注目した研究はほとんどみられない。これは、「働くこと」と「働かないこと」とが対照的な関係であるという前提があるためと思われる。具体的には、「働くこと」は「自立すること」という理解・認識を有している者の場合、「働かないこと」は「自立しないこと」という理解・認識がなされているという前提であり、「働くこと」の理解・認識を明らかにすることができれば、「働かないこと」の理解・認識も明らかにできるという前提である。

ただし、実際には「働くこと」・「働かないこと」の理解・認識がそうした対照的な関係にあるとは限らない。たとえば、個人によっては「働くこと」は「自立すること」であり、「働かないこと」は「自由を得ること」としてそれぞれに異なる肯定的なイメージを有しており、それらの理解・認識が対照的ではない関係を有していることもありうる。とくに「働くこと」と「働かないこと」の理解・認識が価値観として統合・内在化されていない若者にとっては、それらの理解・認識に非一貫的な側面も多くみられるだろう。

また、石川（1981，1982）は労働者がほかの労働者より多く「働くこと」を誇らしく感じ、逆にほかの労働者ほどよく「働かないこと」を恥と感じる競争心（エミュレーション）という概念に注目し、労働意欲を高める外発的なエミュレーション効果について理論的な検討を行っている。このように、「働くこと」に対して「誇らしい」という感情を抱いたとしても「働かないこと」に対して「誇らしくない」という感情を抱くとは限らない。石川が指摘するように「働かないこと」に対して「恥」という理解・認識をすることもあろう。このように、「働くこと」に対する理解・認識と「働かないこと」に対する理解・認識とが異なる構造を有するとも考えられる。

実証研究においても、理想自己研究の文脈では、理想自己の中に「こうありたい」という正の理想自己と「こうありたくない」という負の理想自己の2側面が注目さ

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

れてきた(遠藤, 1992a, 1992b)。そして、これらの研究において、正の理想自己と負の理想自己として個人が重要視する領域が異なること、さらには、日本人の場合正の理想自己よりも負の理想自己の方が自己評価基準として機能すること、自尊心感情への影響力が大きいことが指摘されている。

これらのことを勘案すれば、大学生の「働かないこと」に対する理解や認識は、「働くこと」に対するそれとは異なる内容や構造が抽出されること、さらには進路選択に異なる影響を及ぼすことが予測される。なお、文部科学省(2004)において「望ましい勤労観・労働観の形成」が目標として掲げられているように、これまで「働くこと」の望ましい(と思われる)側面にのみ焦点が当てられることが多く、「働くこと」の望ましくない(と思われる)側面や「働かないこと」について若者がどのように認識・理解しているのかについての研究はほとんどなされていない。そのため、これらを統合的に理解するためにも、「働かないこと」の理解・認識について検討することは意義のあることであろう。

ところで、高橋(2005)によれば、1950年-1960年代の高度経済成長期に、第2次産業、第3次産業の企業の成長により、「働くこと」の現代的な意味は「就職すること」、つまり「会社に入る」こととなっていったとされる。実際に、近年の大学から社会への以降の際の具体的な進路選択行動は「就職活動」と呼ばれるが、大学生は進路選択において「職業選択」や「企業選択」だけでなく、就職するか否かの「就職選択」も行うようになっている。

そこで本研究では、「働くこと」(「働かないこと」)の一側面である「就職すること」(「就職しないこと」)に注目する。杉本(未公開)では「就職すること」に対する社会的表象である就職イメージが注目され、就職イメージ尺度が作成されていることから、本研究では「就職しないこと」に対する認識・理解として、「就職しないこと」のイメージを取り上げる。具体的には、大学生の「就職しないこと」のイメージに対する自由記述をもとに、その内容や構造について探索的に検討する。その際、就職イメージ尺度による「就職すること」のイメージとの関連性も同時に検討することで、「就職すること」イメージとの対応関係を含めた「就職しないこと」イメージの構造を検討できるものと思われる。

なお、安達(2007)は、「就職しない」「フリーター」に注目し、「フリーターのメリットやデメリット」という認識(結果期待)が「フリーターに対する肯定的態度」の規定因となることを明らかにした。具体的には、先行研究から「フリーターのメリット」として“自由”と“社

会経験”を、「フリーターのデメリット」として“物理的な不利益”や“世間での評判”、“将来性”を、そして「フリーターに対する肯定的態度」として“フリーターの生き方”に対する肯定的な考え方と“社会におけるフリーターの位置づけ”に対する肯定的な態度の2側面を想定したうえで、とくにフリーターが社会経験になるというメリットの予測が、フリーターの社会的な貢献を認めフリーターの生き方を肯定する姿勢につながることを示唆している。もちろん、「就職しないこと」がフリーターと同義ではない。そのため、本研究で注目する「就職しないこと」イメージには安達(2007)による「フリーターのメリット・デメリット」との相違点が確認できるだろう。

また、これまでの「働くこと」の価値観に関する研究では、雇用経験が無い者と有る者、大学生と常勤者、進路を決定していない者と決定した者の価値観を比較する研究が多く行われてきた(e.g., 植村, 2004)。その結果、働いている者(働いた経験の有る者・進路を決定した者)の方が働いていない者(働いた経験の無い者・進路を決定していない者)よりも、「働くこと」の価値観が高いことから、進路選択を促すためには「働くこと」の価値観を高めることが必要であると示唆されている。しかし、これらの研究では、すでに働いている者が働く以前からそうした価値観が高くそれが進路選択に結びついたのか、働いたことによって価値観が高まったのかは定かではない。「働くこと」の価値観が大学生の「学校から社会への移行」における進路選択に影響しているかを検討するためには、働いた経験がなく進路を決定していない大学生の価値観に注目して、進路の成熟あるいは未決定の指標との関連を検討する必要がある。

そこで、本研究では「就職しないこと」イメージの構造を明らかにするだけでなく、進路が決定していない大学生の進路未決定の程度に注目し、「就職しないこと」イメージと進路未決定の程度との関連性についても検討する。なお、これまで進路未決定には質の異なる未決定があることが指摘されている。たとえばGati, Krausz, & Osipow(1996)は「進路意思決定の困難さ」として10カテゴリーを同定した上でそれらのカテゴリーに対してクラスター分析を行った。その結果、レディネス不足による未決定のように意思決定過程に先立つ未決定と情報が不足していることや一貫していないことによる未決定のように意思決定過程の間に起こる未決定の大きく2つに分類された。そこで、本研究では、多様な進路未決定の中でも進路選択過程に先立つ未決定に注目して関連性を検討することとした。

## 方法

**調査協力者** 調査協力者は首都圏・東海地方・九州地方の3つの大学の文系学部 に在籍する大学生503名（男性: 241名, 女性: 261名, 不明1名; 1年生: 169名, 2年生: 122名, 3年生: 187名, 4年生: 24名, 不明1名）で、平均年齢は20.18歳 ( $SD=1.29$ ) であった。なお、この調査協力者の人数は、調査時点で進路選択に関する活動（就職活動など）の後、進路を決定していた者を省いた人数である。

**調査内容** ①「就職しないこと」イメージ 「就職しないこと」に対するイメージについて自由記述形式で回答を求めた。②「就職すること」イメージ 杉本（未公開）において就職することに対するイメージを測定する尺度として、拘束的イメージ、制度的イメージ、希望的イメージ、自立的イメージの4下位尺度からなる就職イメージ尺度が作成された。本研究では、杉本（未公開）における信頼性係数や平均値、標準偏差を考慮して、予備調査で得られた就職することに対するイメージの自由記述の回答から新たに項目を作成・統合し、全34項目からなる就職イメージ尺度を作成した。それぞれの項目について、“全くあてはまらない”（1点）から“非常にあてはまる”（7点）の7件法で回答を求めた。③進路未決定 諸井（2002）によって作成された大学生の進路未決定の程度について測定する職業未決定傾向尺度を用いた。この尺度は、下山（1992）、古市（1995）、浦上（1995）の進路未決定に関する尺度を整理して作成された尺度である。本調査ではとくに進路選択過程に先立つ未決定に注目するため、職業未決定傾向尺度の下位尺度である「延期」、「就職回避」、「自己適性の不明確さ」の3下位尺度25項目を用いた<sup>1</sup>。それぞれの項目について、“全くあてはまらない”（1点）から“非常にあてはまる”（7点）の7件法で回答を求めた。

**手続き** 上記の内容を含んだ質問紙調査が、2005年12月中旬から1月中旬にかけて実施された。なお、質問紙は大学の授業時間に配布・回答されたのち、回収された。

<sup>1</sup> 諸井（2002）では、職業未決定傾向尺度を性別ごとに分析を行っており、男女共通に「就職不安」「延期」「就職回避」「自己適性の不明確さ」「職業選択葛藤」「相談希求」の6つの下位尺度を抽出しているが、性別によって項目内容が若干異なる。本研究で取り上げた「延期」「就職回避」「自己適性の不明確さ」の3つの下位尺度も男女によって項目内容は異なるため、男女双方さらにはどちらかにみられる項目を採用した。

## 結果

**尺度構成と基礎統計量** まず、就職イメージ尺度と職業未決定傾向尺度について、尺度構成を行う。

就職イメージ尺度に関して、全34項目に対し因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。固有値の減衰状況（7.66, 5.59, 1.70, 1.47, 1.25, 1.19, …）と意味内容から判断され、4因子が採用された。どの因子に対しても、.35以上の因子負荷量を持たなかった項目を削除し、繰り返し因子分析を行った結果、9項目が削除され、最終的に25項目が採用された。その結果を具体的な項目内容とともにTable1に示す。

因子分析の結果を杉本（未公開）と比較すると、第I因子は「拘束的イメージ」、第II因子は「希望的イメージ」、第III因子は「制度的イメージ」、第IV因子は「自立的イメージ」の項目内容とほぼ対応しており、同様の因子構造が確認された。そこで、それぞれ杉本（未公開）と同様の因子名とした。

次に、職業未決定傾向尺度に関して、全25項目に対し因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。固有値の減衰状況（9.82, 2.82, 1.68, 1.32, 0.96, …）と意味内容から判断され、諸井（2002）と同様に3因子が採用された。どの因子に対しても、.35以上の因子負荷量を持たなかった項目を削除し、繰り返し因子分析を行った結果、2項目が削除され、最終的に23項目が採用された。その結果を具体的な項目内容とともにTable2に示す。

因子分析の結果、第I因子は、諸井（2002）の「自己適性の不明確さ」と項目内容がほぼ対応していたため、「自己適性の不明確さ」と解釈された。第II因子は、諸井（2002）の「就職回避」と「延期」の一部の項目内容から構成されていた。この「延期」の一部の項目は「せっかく大学に入ったのだから、今は職業のことは考えたくない」といった就職について考えることを避ける傾向を示す項目内容であり、就職自体を避けたいという願望を示す「就職回避」として解釈可能であった。そこで、第II因子は「就職回避」と解釈された。第III因子は、諸井（2002）の「延期」に比較的高い負荷量を示していた項目から構成されていた。そこで、第III因子は「延期」と解釈された。

それぞれの尺度の各下位尺度に対して、信頼性係数の推定値（Cronbachの $\alpha$ 係数）を算出した。その結果、就職イメージ尺度の各下位尺度は $\alpha=.76\sim.85$ 、職業未決定傾向尺度の各下位尺度は $\alpha=.79\sim.92$ となり、十分な信頼性が得られた。そこで、これらの各下位尺度の項目得点から加算平均を算出し、その得点をそれぞれの因子の

Table 1 就職イメージ因子分析結果

	因子			
	I	II	III	IV
<b>第Ⅰ因子 拘束的イメージ (<math>\alpha = .85</math>)</b>				
22 社会の流れに流されているということである	<b>.73</b>	.09	-.06	.04
28 小さくまとまることである	<b>.73</b>	-.01	.06	-.08
34 妥協である	<b>.72</b>	-.03	-.04	.00
12 夢をあきらめることである	<b>.69</b>	-.02	.06	-.09
20 やりたいことができないということである	<b>.67</b>	-.12	.00	.06
24 自分の可能性を狭めることである	<b>.66</b>	-.02	.06	-.12
6 時間が縛られるということである	<b>.47</b>	-.03	.01	.14
2 社会のシステムの一部に組み込まれてしまうことである	<b>.41</b>	.03	.13	.10
<b>第Ⅱ因子 希望的イメージ (<math>\alpha = .85</math>)</b>				
31 さまざまな人と出会うことができる	.12	<b>.77</b>	-.18	.18
32 やりがいが得られるものである	-.08	<b>.77</b>	.07	.02
9 夢の実現につながるものである	-.09	<b>.68</b>	.13	-.17
25 自分を成長させるものである	-.04	<b>.67</b>	.04	.02
19 さまざまなことを経験できる	.07	<b>.63</b>	-.16	.26
7 希望を抱くことができる	-.19	<b>.55</b>	.14	-.12
<b>第Ⅲ因子 制度的イメージ (<math>\alpha = .82</math>)</b>				
10 社会的な義務である	.09	-.06	<b>.77</b>	.05
26 社会的な責任である	.08	.00	<b>.71</b>	.00
29 常識である	-.05	-.19	<b>.55</b>	.32
23 社会に貢献するということである	.03	.33	<b>.54</b>	-.20
1 当然のことである	-.21	-.14	<b>.44</b>	.32
13 大人への入り口である	.09	.27	<b>.40</b>	.08
14 社会的な地位を確立することである	.06	.18	<b>.39</b>	.17
<b>第Ⅳ因子 自立的イメージ (<math>\alpha = .76</math>)</b>				
33 生活の安定のために重要なことである	-.04	.09	-.02	<b>.75</b>
18 生きていくために必要なことである	-.01	.05	.24	<b>.59</b>
8 お金を稼ぐということである	.03	-.05	.04	<b>.55</b>
21 家族を養っていく力を身につけることである	.09	.17	.02	<b>.50</b>

因子間相関	II	III	IV
I	-.34	.06	.02
II		.45	.42
III			.61

下位尺度得点とした。なお、各下位尺度の平均値と標準偏差、下位尺度間の相関係数をTable3に示す。

「就職しないこと」イメージの構造 はじめに、「就職しないこと」が大学生にとってどのようにイメージされているかについて検討する。「就職しないこと」イメージの自由記述回答について、テキスト型データ解析ソフ

トウェア「WordMiner」(日本電子計算株式会社)を用いて、回答文章の分かち書き処理、多次元データ解析を行った。なお、分かち書き処理はHapiness/AiBASE(株式会社平和情報センター)によって行われた。

まず、テキスト型データをリファインするため、分かち書きを行った。その結果、構成要素数は2352、句読点・

Table 2 職業未決定傾向尺度の因子分析結果

	因子		
	I	II	III
<b>第Ⅰ因子「自己適性の不明確さ」(<math>\alpha=.92</math>)</b>			
21 どのようにして職業を決めればよいのか分からないので不安である	<b>.89</b>	-.03	-.13
6 自分の能力や適性がよく分からないので、職業が決まらない	<b>.87</b>	-.02	.04
12 何を基準にして将来の職業を考えたらよいのか分からない	<b>.83</b>	.03	.01
9 自分の興味や関心がよく分からないので、職業が決まらない	<b>.76</b>	-.04	.12
3 自分が職業としてどのようなことをやりたいのか分からない	<b>.74</b>	-.06	.15
24 進路を決めるために必要な具体的な情報がないので職業が決まらない	<b>.73</b>	.08	-.10
18 就職した後での職業生活の様子がよく分からないので職業が決まらない	<b>.68</b>	.14	-.03
15 将来の職業は大体決まっており、今はその実現に向けて努力している	<b>-.61</b>	.11	-.15
<b>第Ⅱ因子「就職回避」(<math>\alpha=.90</math>)</b>			
5 できることなら、職業に就かず好きなことをしたい	-.16	<b>.87</b>	.02
8 事情が許せば、仕事に就かず、思いのままに暮らしたい	-.16	<b>.85</b>	.07
11 職業のことなど考えずに、自分の好きなことに集中したい	-.11	<b>.81</b>	.03
2 いつまでも仕事をしないで遊んで暮らせたらいいのと思う	-.08	<b>.72</b>	.06
20 できることなら職業決定は、いつまでも先に延ばし続けておきたい	.17	<b>.64</b>	-.06
17 仕事に迫られる日々を考えると、職業に就くのが嫌になる	.21	<b>.60</b>	-.16
14 就職しないでいつまでも学生でいられたらいいのと思う	.17	<b>.53</b>	-.24
19 将来のことはわからないから、職業のことは考えたくない	.25	<b>.50</b>	.06
23 職業に就くということは、墓場に入るイメージがある	.01	<b>.45</b>	.12
10 せっかく大学に入ったのだから、今は職業のことは考えたくない	.06	<b>.42</b>	.26
13 今は将来の職業について考えたくない	.21	<b>.41</b>	.19
<b>第Ⅲ因子「延期」(<math>\alpha=.79</math>)</b>			
7 職業のことを真剣に考えたことがない	-.04	-.05	<b>.98</b>
1 自分の将来の職業について、真剣に考えたことがない	.13	-.10	<b>.81</b>
4 職業のことは、最終学年になってから考えればいい	.01	.24	<b>.45</b>
22 就職については、まじめに努力しなくてもなんとかなると思っている	.04	.20	<b>.36</b>
因子間相関			
I		.50	.52
II			.53

助詞・特殊記号を除去後の要素数は535であった。さらに、解析対象の構成要素を整理し分析見通しを改善するため、同種の語を一つの語に置換し、不要な語を削除するための置換辞書と削除辞書を作成し、データをリファインした。得られた構成要素のうち、出現頻度の少ない構成要素は一般性が低いと判断し、頻度が6以上(閾値=6以上)を採用した結果、構成要素数は46となった。構成要素において、最も頻度が高かったのは「ニート」で46回、40回以上出現した構成要素は「不安定」「自由」であった。閾値6以上の構成要素をTable4に示す。

次に、「就職しないこと」イメージの構造を検討する。なお、「就職しないこと」イメージの構造における「就職すること」イメージとの対応関係も同時に検討するため、就職イメージ尺度との関連性も検討する。

まず、就職イメージ尺度において、各下位尺度得点の平均値±0.5SDを基準に各下位尺度が低群・中群・高群の3群に分類され、12の構成要素に変換された。

次に、変換された就職イメージ尺度に関する構成要素を「就職しないこと」イメージの構成要素に加え、全58の構成要素を対象に対処分析を行った。さらに、対

大学生における「就職しないこと」イメージの構造と進路未決定

Table 3 就職イメージ尺度と職業未決定傾向尺度における下位尺度の平均値と標準偏差, および相関係数

	拘束的 イメージ	希望的 イメージ	制度的 イメージ	自立的 イメージ	自己適性の 不明確さ	就職回避	延期	Mean	SD
拘束的イメージ								4.01	1.00
希望的イメージ	-.34 ***							5.42	.95
制度的イメージ	.06	.45 ***						5.25	.94
自立的イメージ	.02	.42 ***	.61 ***					5.96	.80
自己適性の不明確さ	.29 ***	.04	-.26 ***	.01				3.82	1.39
就職回避	.44 ***	-.11 *	-.39 ***	-.12 **	.50 ***			3.26	1.21
延期	.27 ***	-.20 ***	-.38 ***	-.21 ***	.52 ***	.53 ***		2.40	1.16

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

Table 4 「就職しないこと」イメージの構成要素と度数

構成要素	度数	構成要素	度数	構成要素	度数	構成要素	度数
1 ニート	46	13 ダメ	15	25 怠惰・墮落	10	37 他・別	8
2 不安定	43	14 遊び	14	26 ない	9	38 やりたいことあり	7
3 自由	42	15 良くない	14	27 甘え	9	39 やる気なし	7
4 親・親戚	27	16 お金	13	28 時間	9	40 目標・目的あり	7
5 フリーター	26	17 怠慢	13	29 生き方・人生	9	41 目標・目的なし	7
6 生活	25	18 逃避・回避	13	30 不可能	9	42 冷たい目	7
7 不安	24	19 だらけ	12	31 夢	9	43 すねかじり	6
8 だらしな	23	20 やりたいこと・好きなこと	12	32 まだ	8	44 モラトリアム	6
9 将来	22	21 探索	12	33 何か	8	45 仕事	6
10 自分	21	22 生きていく	11	34 楽	8	46 追求	6
11 社会	21	23 未独立	11	35 自立していない	8		
12 頼る・依存	18	24 ありえない・考えられない	10	36 進学・研究者	8		

Table 5 「就職しないこと」イメージのクラスタごとの構成要素

クラスター	クラスター-1 否定的側面	クラスター-2 夢追求	クラスター-3 やりたいこと志向	クラスター-4 社会的位置づけ	クラスター-5 両面的側面	クラスター-6 身内への依存	クラスター-7 生活不可能	クラスター-8 批判的側面
サイズ	14	2	4	3	15	4	2	14
構成要素	お金 ない まだ ダメ 楽 <希望低群> <拘束高群> <自立低群> 社会 将来 <制度低群> 逃避・回避 不安 冷たい目	追求 夢	やりたいこと・好きなこと やりたいことあり 自分 探索	ニート フリーター 進学・研究者	モラトリアム 何か <希望中群> <拘束中群> 時間 自由 <自立中群> <制度中群> 生き方・人生 怠惰・墮落 怠慢 不安定 未独立 目標・目的あり 良くない	すねかじり 親・親戚 生きていく 頼る・依存	生活 不可能	ありえない・考えられない だらけ だらしな やる気なし 甘え <希望高群> <拘束低群> 仕事 自立していない <自立高群> <制度高群> 他・別 目標・目的なし 遊び

注：< >内の語は、就職イメージ尺度の各下位尺度の低群・中群・高群を構成要素に変換したものである。

応分析から得られた成分スコアをもとにクラスター分析を行った。その結果、8つのクラスターに分類された (Table5)。また、それぞれの構成要素の配置図を

Figure 1に示す。

クラスター1は、「就職しないこと」について、「楽」または「社会」からの「逃避・回避」であり「冷たい目」

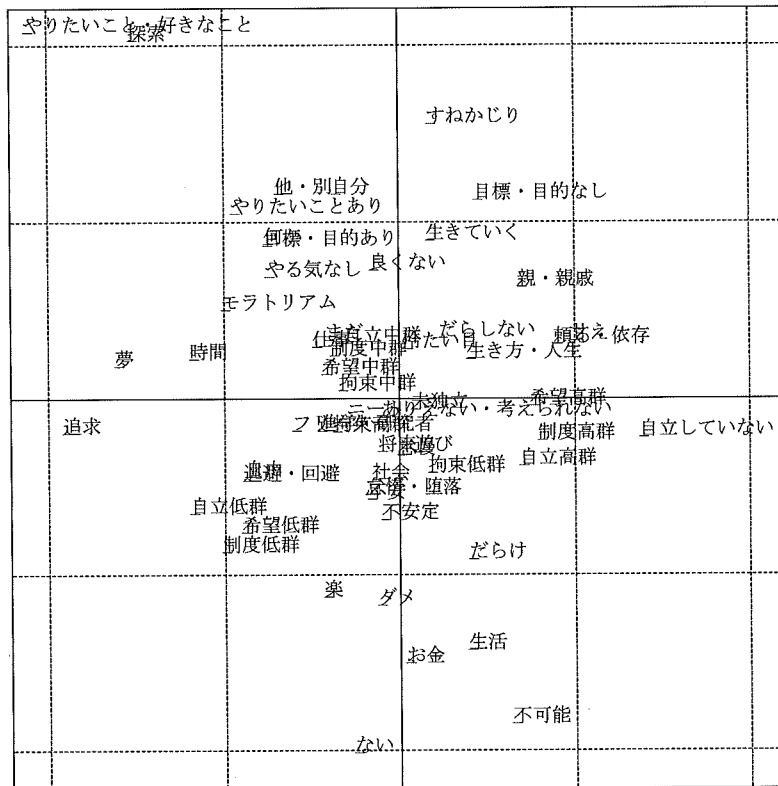


Figure 1 「就職しないこと」イメージ構成要素の布置図

でみられ「将来」が「不安」で「お金」が「ない」ことというイメージから構成されており、就職イメージ尺度の＜拘束高群＞、＜希望低群＞、＜制度低群＞、＜自立低群＞と同一のクラスターであった。「就職しないこと」について否定的であることから、「否定的側面」と名づけた。クラスター2は、「夢」を「追求」というイメージから構成されていたため、そのまま「夢追求」と名づけた。クラスター3は、「就職しないこと」について、「自分」に「やりたいこと」があったり、「やりたいこと・好きなこと」を「探索」したりすることというイメージから構成されており、やりたいことを志向するイメージを示しているため「やりたいこと志向」と名づけた。クラスター4は、「就職しないこと」について、「ニート」「フリーター」「進学・研究者」というイメージから構成されており、就職しない場合の進路先、すなわち客観的な社会における位置づけを示しているため「社会的な位置づけ」とした。クラスター5は、「就職しないこと」については、「何か」「目標・目的」があったり「自由」な「時間」があったりする反面、「生き方・人生」が「不安定」で、「怠惰・堕落」「怠慢」などがあり、「モラトリアム」で

「良くない」というイメージから構成されており、就職イメージ尺度の＜拘束中群＞、＜希望中群＞、＜制度中群＞、＜自立中群＞と同一のクラスターであった。「就職しないこと」について両面的な側面を捉えていたため「両面的側面」とした。クラスター6は、「就職しないこと」について、「親・親戚」に「頼る・依存」して「すねかじり」をして「生きていく」というイメージから構成されていたため「身内への依存」とした。クラスター7は、「就職しないこと」について、「生活」が「不可能」というイメージから構成されていたため、そのまま「生活不可能」とした。クラスター8は、「就職しないこと」について、「遊び」や「だらけ」であり、「だらしない」く、「他・別」に「目標・目的」なく、「やる気」なく、「甘え」ており「自立していない」ため、「ありえない・考えられない」というイメージから構成されており、就職イメージ尺度の＜拘束低群＞、＜希望高群＞、＜制度高群＞、＜自立高群＞と同一のクラスターであった。「就職しないこと」を全体的に批判的に捉えていることから「批判的側面」とした。

なお、「就職しないこと」イメージの構造として、「否

定的側面」「両価的側面」「批判的側面」は「就職すること」のイメージである就職イメージ尺度と同一のクラスターであった。「否定的側面」では、「就職すること」イメージと「就職しないこと」イメージに、＜拘束高群＞と「楽」という対照的な関係と、＜希望低群＞と「将来」が「不安」、＜制度低群＞と「社会」からの「逃避・回避」、＜自立低群＞と「お金」が「ない」などの類似した関係がみられた。「両価的側面」については、「就職すること」イメージと「就職しないこと」イメージに、＜拘束中群＞と「自由な「時間」、＜希望中群＞と「怠惰・堕落」「怠慢」、  
「モラトリアム」、＜自立中群＞と「生き方・人生」が「不安定」など、就職イメージ尺度における各下位尺度の中群の得点範囲を勘案すれば、ほぼ対照的な関係がみられた。「批判的側面」については、「就職すること」イメージと「就職しないこと」に、＜希望高群＞と「他・別」に「目標・目的なし」「やる気なし」、＜制度高群＞と「ありえない・考えられない」、＜自立高群＞と「自立していない」など、概ね対照的な関係がみられたが、「両価的側面」とは異なり、＜拘束低群＞と対照的な「就職しないこと」イメージはみられなかった。以上のように、「就職すること」イメージと「就職しないこと」イメージに、対照的な関係が多く見られた。すなわち、本研究の「就職しないこと」イメージの構造の一部は「就職すること」イメージと対照的な側面を有するといえる。

一方、その他の5つのクラスターについては、就職イメージ尺度に関する構成要素とは同一のクラスターにならず、「就職しないこと」イメージのみから構成された。これらは、「就職すること」イメージと関連がみられず、「就職しないこと」イメージの独自の構造を示すものと思われる。

「就職しないこと」イメージと進路未決定の関連 次に、「就職しないこと」イメージと進路未決定との関連性を検討する。

まず、職業未決定傾向尺度において、各下位尺度得点

の平均値±0.5SDを基準に各下位尺度が低群・中群・高群の3群に分類され、9の構成要素に変換された。

変換された進路未決定の構成要素を「就職しないこと」イメージのクラスターとして分類された8の構成要素に加え、全17の構成要素を対象に対応分析を行った。さらに、対応分析から得られた成分スコアをもとにクラスター分析を行った。その結果、3つの構成要素クラスターに分類された (Table6)。それぞれの構成要素の配置図をFigure 2に示す。

構成要素クラスター1は、職業未決定傾向尺度の各下位尺度の＜高群＞と、「否定的側面」「夢追求」「やりたいこと志向」から構成されていた。構成要素クラスター2は、職業未決定傾向尺度の各下位尺度の＜中群＞と、「社会的位置づけ」「両価的側面」「生活不可能」から構成されていた。構成要素クラスター3は、職業未決定傾向尺度の各下位尺度の＜低群＞と、「身内への依存」「批判的側面」から構成されていた。

さらに、進路未決定の質の違いによって、「就職しないこと」イメージと進路未決定との関連性に異なる結果が得られることが考えられたため、職業未決定傾向尺度の下位尺度ごとの3構成要素と「就職しないこと」イメージのクラスターを対象に対応分析を行った。そのうえで、対応分析から得られた成分スコアをもとにクラスター分析を行った。

その結果、職業未決定傾向尺度における「就職回避」においては、「就職しないこと」イメージのクラスターと職業未決定傾向尺度の3下位尺度との関連性を検討した結果と同様の結果が得られた。しかし、「自己適性の不明確さ」においては、その傾向が低い場合、「身内への依存」が同一の構成要素クラスターにはならず、「批判的側面」とのみ同一の構成要素クラスターに分類されること、そして、「延期」においては、「生活不可能」が中程度の傾向の構成要素クラスターとは同一にならず、その傾向が低い構成要素クラスターと同一になることが

Table 6 「就職しないこと」イメージクラスターと進路未決定におけるクラスターごとの構成要素

クラスター	構成要素クラスター 1	構成要素クラスター 2	構成要素クラスター 3
サイズ	6	6	5
構成要素	<p>＜延期高群＞</p> <p>クラスター 1</p> <p>クラスター 2</p> <p>クラスター 3</p> <p>＜自己適性の不明確さ高群＞</p> <p>＜就職回避高群＞</p>	<p>＜延期中群＞</p> <p>クラスター 4</p> <p>クラスター 5</p> <p>クラスター 7</p> <p>＜自己適性の不明確さ中群＞</p> <p>＜就職回避中群＞</p>	<p>＜延期低群＞</p> <p>クラスター 6</p> <p>クラスター 8</p> <p>＜自己適性の不明確さ低群＞</p> <p>＜就職回避低群＞</p>

注：＜ ＞内の語は、職業未決定尺度の各下位尺度の低群・中群・高群を構成要素に変換したものである。



明らかとなった。

## 考察

「就職しないこと」イメージの構造 本研究では、テキストマイニングという手法を用いて、大学生の「就職しないこと」イメージの構造について自由記述回答を探索的に分析することが第1の目的であった。

「就職しないこと」イメージの自由記述回答から抽出された構成要素と、就職イメージ尺度の各下位尺度における尺度得点から分類された各3群を変換することで得られた構成要素をまとめて対応分析を行った。成分得点を用いたクラスター分析の結果、大学生の「就職しないこと」イメージの構成概念として「否定的側面」「夢追求」「やりたいこと志向」「社会的位置づけ」「両価的側面」「身内への依存」「生活不可能」「批判的側面」の8つが明らかとなった。すなわち、大学生は「就職しないこと」を「夢追求」や「やりたいこと志向」のように肯定的に捉える一方で、「否定的側面」「生活不可能」や「批判的側面」のように否定的にも捉えていることが明らかとなった。また、肯定的な側面と否定的側面を両方有する「両価的

側面」や「社会的位置づけ」にみられるような中立的なイメージ、さらには「身内への依存」といった周囲との関係を考慮したイメージがみられた。このように、「就職しないこと」のイメージは、一元的ではなく個人によってさまざまな捉え方がなされる可能性が示唆された。

安達（2007）において「フリーター」への結果期待として因子分析によって抽出された「フリーターのメリット・デメリット」と比較してみると、「フリーターのメリット」の“自由・融通”と「フリーターのデメリット」の“不安定”がそれぞれ、「就職しないこと」イメージの「両価的側面」や「否定的側面」のイメージの一部として構成されていた。とくに、これらのイメージは構成要素として高い頻度であったイメージでもあり、「就職しないこと」と「フリーター」の共通の要素であり、これらのイメージとして重要な側面であることが伺える。

一方、安達（2007）において抽出されたフリーターのメリットである“社会経験”やフリーターのデメリットである“キャリア形成への支障”“悪条件”“低い社会的評価”に関する「就職しないこと」イメージについては、本研究では確認されなかった。これらのメリットやデメ

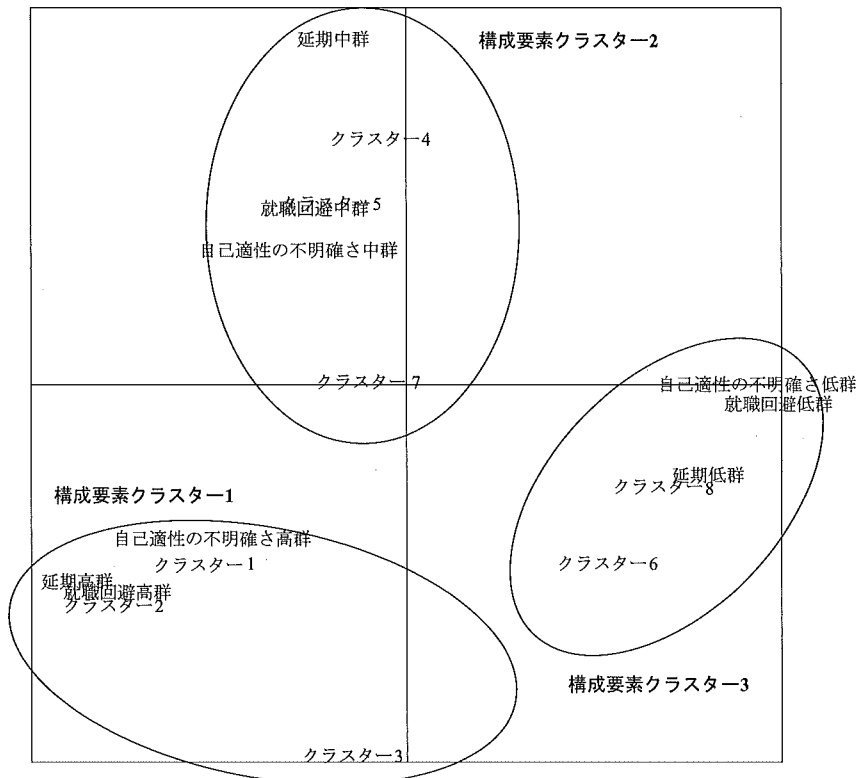


Figure 2 「就職しないこと」イメージクラスターと職業未決定尺度の構成要素の布置図

リットは、本研究で確認された“自由・融通”や“不安定”と異なり、社会との接点を通じたメリット・デメリットであると思われる。そのため、まだ働いたこともなく進路が決定していない大学生に意識されやすいイメージであるとは言い切れない。

実際に、本研究では安達（2007）においてフリーターのメリット・デメリットとしては想定されなかった「夢追求」「やりたいこと志向」「社会的位置づけ」「身内への依存」「生活不可能」「批判的側面」など独自の部分が多くみられた。これらは、社会との接点を通じたイメージというよりも個人の日常で意識されやすいイメージと考えられる。

確かに、“フリーター”という構成要素が「社会的位置づけ」の構成要素の1つとして抽出されていることから明らかなように、大学生にとって“フリーター”のイメージは“就職しないこと”のイメージと重なる側面はあるが、決して同義ではない。また、本研究はイメージについての検討であり、安達（2007）ではメリット・デメリットについての検討である。こうした違いが本研究で独自のイメージが見出された大きな原因と考えられるが、本研究で確認された「就職しないこと」イメージは「フリーターのメリットやデメリット」と全く異なるわけではない。これらのことを勘案すれば、本研究では「就職しないこと」イメージについて大学生の自由記述から検討したため、より個人が日常で意識しやすい「就職しないこと」の独自のイメージを考慮できたものと思われる。言い換えれば、社会との接点を通じた「就職しないこと」イメージは普段からは大学生に意識されづらいとも考えられる。

「就職しないこと」イメージと進路未決定の関連 さらに本研究では、「就職しないこと」イメージと進路未決定との関連性を検討することが第2の目的であった。

「就職しないこと」イメージの8クラスターと、職業未決定傾向尺度の各下位尺度における尺度得点から分類された各3群を変換することで得られた構成要素をまとめて対応分析を行った。成分得点を用いたクラスター分析の結果、「就職しないこと」イメージによって進路未決定の程度が異なることが明らかとなった。

まず、「就職しないこと」について「否定的側面」「夢追求」「やりたいこと志向」と捉えられている場合進路未決定の程度が高いことが明らかとなった。

「否定的側面」に関して、本来なら「就職しないこと」を否定的に捉えているのであれば、進路未決定の程度は低いと考えられる。しかし、この「否定的側面」は進路選択を促進しない「就職すること」イメージと関連が強く、「就職すること」と「就職しないこと」に類似した

イメージがみられた。すなわち、「就職すること」と「就職しないこと」のイメージとを統合できているとはいえず、これらのイメージに対するあいまいさが進路未決定の高さと関連したものと思われる。また、「夢追求」や「やりたいこと志向」に関しては、これまでフリーターの夢追い型やフリーターの「やりたいことをやる」という価値観を中心とした特徴をもつ職業意識などで取り上げられてきた（小杉，2003；日本労働研究機構，2000）。本研究では進路を決定していない大学生が対象であり、進路選択に先立つ未決定を取り上げた検討であったが、同様の結果がみられた。すなわち、「就職しないこと」を「夢追求」、「やりたいこと志向」と捉えている者は、就職以外の選択肢を積極的に考えているわけではなく、そう捉えることで、進路選択に先立つ未決定への不安に折り合いをつけている可能性が示唆された。

次に、「就職しないこと」について「社会的位置づけ」「両価的側面」「生活不可能」と捉えられている場合進路未決定の程度が中程度であることが明らかとなった。

「社会的位置づけ」に関しては、就職しない場合の進路の可能性を示す要素からクラスターが構成されており、中立的なクラスターであるため、納得のいく結果である。また「両価的側面」に関しては、「就職しないこと」について肯定的・否定的の両側面を有している。「就職すること」のイメージも全体的に中程度であり、「就職すること」、「就職しないこと」への理解・認識が統合されていないことがうかがえる。そのため、「就職しないこと」に「両価的側面」を有する者は、こうした理解・認識を統合していくことが進路選択を継続していく際に求められるだろう。「生活不可能」に関しては、進路未決定が中程度であっても生活ができないという理解認識があることが明らかとなった。ただし、「延期」に関する進路未決定傾向の場合、その傾向が中程度の場合同一のクラスターに属さず、低い場合同一のクラスターになることが明らかとなった。近年の進路選択では、生活できるか否かという基準よりも、個人の興味・関心という基準が重視される傾向にある（e.g. 安達，2008）。しかし、「就職しないこと」によって生活ができないというイメージを有している者は、進路選択に関して「延期」をしない傾向がある。すなわち、生活が可能か不可能かという基準も進路選択を考える際に、重要な役割を果たす可能性が示唆された。

一方、「就職しないこと」について「身内への依存」「批判的側面」と捉えられている場合進路未決定の程度が低いことが明らかとなった。

先にも述べたように、近年の進路選択では個人の志向性が重視される傾向にあるが、「就職しないこと」によ

り身内に依存すること、すなわち他者との関係性にまで目を向けることが意識される者は、進路未決定の程度が低いことが明らかとなった。このように、個人の基準だけでなく、周囲の者と共存していくというイメージの強さが、進路選択を促す要因となりうる。また「批判的側面」に関しては、就職しないことに強い批判を示していることから、進路未決定の程度が低いという結果は妥当な結果であり、就職することと就職しないことの理解・認識を統合し、内在化していると捉えることも可能である。しかし、その一方で「就職しないこと」を批判的に捉え、「就職すること」を当然だと認識している場合、今後の職場での適応に疑問が残る。学校間移行の研究では、「普通は学校に行くものだから」などの自律的とはいええない進学動機の場合、進学後の学校不適應の高さにつながる可能性が示唆されている（永作・新井，2005）。このことを勘案すれば、「批判的側面」を有する者の場合、リアリティ・ショックや職場不適應を引き起こす可能性があり、留意すべきであろう。

以上のように、進路未決定の程度によって「就職しないこと」イメージの捉え方が異なっていることが明らかとなった。さらに、進路未決定の質や内容の違いによっても「就職しないこと」イメージの捉え方が若干異なることも明らかになったといえ、それらの相違点を考慮することも必要だろう。

## 本研究の限界と今後の課題

本研究では、「就職しないこと」のイメージについてテキストマイニングによる検討を行ったが、ここでは4つの限界を取り上げる。

まず、1つとして調査対象の偏りが考えられる。本研究では「就職しないこと」イメージとして、閾値6以上の構成要素を対象に分析を行った。しかし、本研究で取り上げられなかった構成要素が調査対象を変更することで分析対象となることも考えられる。この点は、テキストマイニングによる検討の際には、必ず考慮すべき点であり（e.g., 藤井, 2003; 小川・斎藤, 2006）、今後はより広い範囲の対象者を考慮して今回取り上げることでできなかった「就職しないこと」イメージについても検討していく必要があるだろう。

次に、本研究の結果が量的データの相関関係による影響を受けていることが考えられる。本研究では、「就職しないこと」イメージの構造の検討および進路未決定との関連を検討する際に、就職イメージ尺度および職業未決定傾向尺度における量的データをもとにそれぞれ高群・中群・低群の3群に分類し、質的データに変換した。そのため、各尺度の各下位尺度間の相関関係がそれぞれ

の対応分析の結果に少なからず反映されているものと思われる。今後、就職することのイメージや進路未決定についても自由記述から得られた質的なデータを用いて検討することによって、本研究の結果が量的データにおける相関関係の影響をどの程度受けているのか検証することも必要だろう。

さらに、本研究ではまだ進路が決定していない大学生を対象として、「就職しないこと」イメージと進路未決定との関連性を検討したが、「就職しないこと」イメージが進路選択の行動に及ぼす直接的な影響については検討していない。「就職しないこと」イメージが進路選択行動に影響を及ぼすのか、また、「就職すること」のイメージとどちらの影響力が強いのかなど、今後の検討課題としてあげられよう。

そして最後に、本研究では「就職しないこと」イメージに注目したが、このイメージは「就職すること」や「働くこと」、「働かないこと」などのイメージと密接に関連している。そのため、一定期間内に個人内におけるそれらのイメージの統合・分化プロセス、さらには形成・維持プロセスが確認されるものと思われる。しかし、先行研究ではこうしたプロセスに関する研究は非常に少なく、ほとんどそのプロセスは明らかになっていない。また、こうしたプロセスを考える際には、大学生の日常の活動や進路選択行動との相互影響過程を考慮する必要がある。今後はこれらのプロセスを明らかにしていくことによって、大学生の進路選択プロセスをより詳細に検討していくことが重要であると思われる。

## 引用文献

- 安達智子（2007）. 若年層のフリーターに対する肯定的態度の構造と規定要因 実験社会心理学研究, 47, 39-50.
- 安達智子（2008）. 女子学生のキャリア意識—就業動機、キャリア探索との関連— 心理学研究, 79, 27-34.
- 遠藤由美（1992a）. 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討 教育心理学研究, 40, 157-163.
- 遠藤由美（1992b）. 自己評価基準としての負の理想自己, 心理学研究, 63, 214-217.
- 藤井美和（2003）. 大学生のもつ「死」のイメージ: テキストマイニングによる分析 関西学院大学社会学部紀要, 95, 145-155.
- 古市裕一（1995）. 青年の職業忌避的傾向とその関連要因についての検討 進路指導研究, 16, 16-22.
- Gati, I., Krausz, M., & Osipow, S. H. (1996). A taxonomy of difficulties in career decision making. Journal

- of Counseling Psychology, 43, 510-526.
- 本田由紀 (2005). 若者と仕事—「学校経由の就職」を超えて—東京大学出版.
- 居神浩・三宅義和・遠藤竜馬・松本恵美・中山一郎・畑秀和 (2005). 大卒フリーター問題を考える ミネルヴァ書房.
- 石川経夫 (1981). 労働意欲の決定因としてのエミュレーション効果について 経済学論集, 47, 2-15.
- 石川経夫 (1982). 労働意欲の決定因 経済セミナー, 327, 116-122.
- 柿原長弘 (1997). 職業高校生の勤労観に関する基礎研究 (1) 進路指導研究, 18, 39-46.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2002). 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について (調査研究報告書).  
<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/sinro/1hobun.pdf>
- 小杉礼子 (2003). フリーターという生き方 勁草書房.
- 三川俊樹 (1991). 日本の青年における職業 (労働) 価値観 カウンセリング研究, 24, 27-36.
- 文部科学省 (2004). キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002/010.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002/010.pdf)
- 日本労働研究機構 (編) (2000). フリーターの意識と実態—97人へのヒアリング結果より— 日本労働研究機構, 136.
- 諸井克英 (2002). 青年における職業未決定傾向と自我同一性 同志社女子大学学術研究年報, 53, 284-310.
- 永作稔・新井邦二郎 (2005). 自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討 教育心理学研究, 53, 516-528.
- 小川一美・斎藤和志 (2006). テキストマイニングによる中学生の自由記述データの探索的分析—個人特性および人口学的変数との関連から— 愛知淑徳大学論集—コミュニケーション学部篇—, 6, 83-93.
- 下山晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で— 教育心理学研究, 40, 121-129.
- 杉本英晴 (未公刊). 就職イメージと職業的キャリア未決定および進路選択行動との関連 早稲田大学人間科学研究科修士論文.
- 高橋美保 (2005). 「働くこと」の意識についての研究の流れと今後の展望—日本人の職業観を求めて— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 45, 149-157.
- 太郎丸博 (編) (2006). フリーターとニートの社会学 世界思想社.
- 植村善太郎 (2004). 就労観の探索と常勤経験有無による就労観の差異 日本進路指導学会第26回研究大会論文集, 72-73.
- 浦上昌則 (1995). 女子短期大学生の進路選択に対する自己効力と職業不決断—Taylor & Betz (1983) の追試的検討— 進路指導研究, 16, 40-45.

(2008年11月5日受稿)

## ABSTRACT

## Representation Structure of “Not Getting a Job” and Career Indecision Among University Students: Examination through Text Mining Techniques

Hideharu SUGIMOTO

The present study examined the representation structure of “not getting a job” among university students and the relationships between such representations and career indecision. A total of 503 university students were asked to report how they would think about “not getting a job” in an open-ended question along with two scales measuring career indecision and the representations of getting a job. Results of text mining techniques indicated that the high, middle, and low classes of the text data subscale and the representation subscale were divided into eight clusters respectively: these were “negative aspect”, “chasing one’s dream”, “do-what-one-wants-to-do oriented”, “position in society”, “ambivalent aspect”, “dependence on the family”, “impossibility of life”, and “critical aspect”. The negative aspect was categorized into the same cluster as the representation of getting a job that had preventing effects on career choices, whereas the critical aspect was grouped into the same cluster as the representation with enhancing effects. The ambivalent aspect and the low class of the representation subscale were sorted into the same cluster. Furthermore, it was found that those who captured the representations of “not getting a job” as the “negative aspect”, “chasing one’s dream”, or “do-what-one-wants-to-do oriented” were most likely to be with an undecided career. Those who regarded such representations as “position in society”, “ambivalent aspect”, or “impossibility of life” were less likely to have had an undecided career, while students seeing the representations as “dependence on the family” or “critical aspect” were least likely. These results confirmed that the representations of “not getting a job” among university students had various aspects, and they could possibly affect students’ career indecision. (Number of words: 268 words)

Key words: Representations of “Not Getting a Job”, Career Indecision, Text Mining Techniques, University Students